

六朝時代における文学評語「新」

——西晋太康、齐梁文学の「新」と文心雕龍——

久保卓哉

A Critical Word "XIN" 新 in the Literature of the Six Dynasties —— "XIN" 新 in the literature of TAI KANG era
in XI JIN, JI, and LIAO with reference to WEN XIN TIAO LONG —— Takuya Kubo

まえがき

いつの世でも「新」傾向を追う風潮は存在するものであるが、六朝時代に文学を評する語として見られることばに、新・清新・新奇・新麗・新綺・新意・新變・新切・新致・新絶・新巧・新声・新詩・新詞がある。これらの文学評語はいったいどんな内容を持ったことばなのか。「新」とは斬新さにはちがいないのだが、では『晋書』に見える、

湛幼有盛才、文章宏富、善構新詞。
(夏侯湛傳)

「善く新詞を構う」とはどういう内容を持つのか。又『文心雕龍』に言う、
宋初訛而新
(通變)

の「新」とはどういう内容を持ったことばなのか。

「新」字をもとに六朝文学の特質をたどってみることにする。

一、古来の「新」

古来の「新」の語義を『説文』によってみるに、

新、取木也、从斤采聲。
(説文第十四篇上)

取木者、新之本義。引申之、為凡始基之稱。
(段玉裁注)

「新」は原来木を切り取るのがその本義であったが、切りたての木はまだなま

なましくて新しいことから清・段玉裁が言うように引申の義として、もののはじまりを表わすようになった。文献にはこの引申の義が古くから見える。例えば殷の賢宰相伊尹のことば、

今嗣王、新服厥命、惟新厥徳。終始惟一、時乃日新。
(尚書 咸有一徳)

あらたに天子となる者は常に自分の徳をあたらしくすべきであり、しかもそれを日に日にあたらしくするよう努めるべきであるとの戒めのごときがそれである。そして「新」は「温故而知新」(論語 為政)や「周雖旧邦、其命惟新」(毛詩 大雅文王)の如く、言語の法則上当然の事としてふるきものに相対して用いられる。「新」とは言うまでもなく新しいことであるが、更につきつめれば日々に未来へと展開する方向性と、未だかつて存在しなかったものという意味内容を持つと言える。

その「新」が文学に関する内容を持つことばとして見えるものに、新歌、新聲・新曲・新詩がある。

陳鐘按鼓、造新歌些
(楚辭 招魂)

魂をいざなう宴で鐘をつらね鼓を打って、新曲の歌を奏でる。

衛靈公見曰、今者來、聞新聲、請奏之。
(史記 樂書)

未だ聞いたことのない鼓琴の音楽を耳にして、今一度ぜひ聞きたいと所望する。

詠新詩、以悲歌兮、舒滯積而宣鬱。
(蔡邕 琴瑟賦)

新詩を作つて胸にたまつた悲しみを歌う。

これらの新歌・新聲・新詩はいずれも新作の歌曲、詩という意味のことはである。とりわけ楽府庁を設置した漢武帝の世に出現した李延年の「新聲曲」は、拙論の展開上象徴的な意味を持つ。

李延年善歌、為新聲。是時上方興天地諸祠、欲造樂、令司馬相如等作詩頌。延年輒承意弦歌所造詩、為之新聲曲。(漢書 李延年傳)

倡優の出の李延年はその歌曲の巧みさを見込んだ武帝によって協律都尉に起用され、司馬相如等の文人たちによって作られた郊祀歌十九章の歌詩を作曲する。

この曲を『漢書』は新聲曲と伝える。新聲曲とは、その当時及びそれ以前の音楽として存在していた趙聲・代聲・秦聲・楚聲の音楽とはちがった全く新しい曲で、中央アジアやインドのいわゆる西域伝来の音楽を導入した李延年による新曲であった。(鈴木修次「漢魏詩の研究」) つまり漢に未だかつて存在しなかった音楽が新聲曲なのである。その李延年に興味深い話がある。

初夫人兄延年性知音、善歌舞、武帝愛之。每為新聲變曲、聞者莫不感動。延年侍上起舞、歌曰、北方有佳人、絕世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國、寧不知傾城與傾國、佳人難再得。上嘆息曰、善、世豈有此人乎。(漢書 孝武李夫人傳)

美人を表わす傾城・傾國の語のもととなる話であるが、一たび顧みれば人の城を傾けるほどの美人の存在を歌う李延年の歌に対して武帝は嘆息をつきながら感じ入るのである。この美人とは実は李延年の妹で後に武帝の愛を得た李夫人のだが、李延年の披露した歌になぜ武帝が耳を奪われたのか。その理由は、鈴木氏前掲書の指摘の通り「一顧傾人城、再顧傾人國」という比喩の見事さと発想の奇抜さであり、一つには「辭人の遺翰に五言を見る莫し」(文心雕龍 明詩)という漢初において、五言のリズムを基調としている目新しさであり、一つには今では再現すべくもないが恐らく西域伝来の音楽を取入れた新しいメロディがあったのであろう。

これら新聲・新歌・新詩の語は文学に係わる用語であっても文学評語ではない。しかし比喩と発想の奇抜さ、五言か四言かの中国語のリズム、耳にしたしむメロディの音韻効果といった事柄は、その後文学評語として用いられた「新」が有す

るに至った内容を、そのまま象徴的に内包している。

二、西晋文学の「新」

陸機と陸雲

六朝において「新」と熟する評語に清新・新奇・新麗・新綺・新意・新姿・新切・新致・新絶・新巧・新声・新詩・新詞・新事・新律等の文学評語が存在するが、「新」をもって文学を批評するのは、文学批評史の上では、私の調べた所では、西晋太康年間の文人陸雲が最初であろうと思われる。それ以前、つまり一時代前の魏において、曹丕・曹植兄弟を中心にした建安文学が文学史上画期的な時代を築くが、この時の文学批評書、魏文帝曹丕の『典論・論文』にも「新」の字をもって文学の新しさを主張し批評することが出てきていない。西晋の世において初めて「新」の字で文学を評する評語が出てきたというのは、やはりそれなりの理由があるからであると考えざるを得ない。

西晋太康年間というのは、『詩品』に言うように文学史上、建安時代に次ぐ文学の黄金時代である。この太康年間の文学は何が特徴かと言えば、沈約が『宋書』謝靈運傳論で言うように、「綱旨は星のごとく稠く、繁文は綺のごとく合す」星のきらめきのように文を飾り立て、絹のあやもようのように美しく工夫をこらすのが特徴である。「新」なる文学評語がこの時代の文人によって使われているということは、この特徴と多に関係があると予想される。

その「新」という評語を使った陸雲は、西晋太康文学の第一人者である陸機の弟で、兄陸機に宛てた手紙「與兄平原書」三十五通を残している。その中で陸雲は頻りに、兄の詩や文章は「清新」である「新奇」である「新綺」である、と賞賛している。

例えば、自分は最近「登遐頌」という四言詩を作ったがどうにも自信が持てない、棄ててしまおうか、ただもし兄が私の詩に潤色を加えてくれれば出色の出来映えになることはまちがいないと、陸機に自作への加筆を頼んで次のように言う、

今視所作、不謂乃極。更不自信、恐年時間復損棄之。徒自困苦爾。兄小加潤色、便欲可出。極不苦作文。但無新奇、而體力甚困瘁耳。

陸雲にとって心配だったのは自分が修辞を加えて潤色する力に劣る点であった。

もし兄の機が潤色を加えてくれれば出色のでき映えになるだろうと、修辞を得意とする兄に頼み込む。そして重要なのは文学とは「新奇無くして、體力は甚だ困瘁するのみ」のものであることを述べていることである。陸雲は斬新な目新らしさと型破りな独創性の無い作品は、みなぎる力感に欠けた疲弊したものになると言うのである。「新奇」とは文学における斬新性と独創性を言う^②。陸雲は兄の文学を見ていて、つくづく文学には「新しさ」が心要だと思ったようである。

陸雲に言わせれば兄はその斬新さに輝いている作家であった。

漏賦、可謂清工。兄頓作爾多文、而新奇乃爾。真令人怖、不當復道作文。

兄の「漏刻賦」をはじめとする多くの賦作品はおしなべて新奇さに溢れており自分は畏怖を感じて二度と文を書こうとは言えないほど。

祠堂頌、已得。(略)事同又相似、益不古、皆新綺。用此已自為洋洋耳。

「祠堂頌」は兄の作品の中では佳いでき映えとは言えないが、古さは感じられず寧ろ甚だ新綺(綺はかざりがあって美しい)であって、この新綺性のゆえにこそ佳作たり得ている。

兄文章之高遠絶異、不可復稱言。然猶皆欲微多。但清新相接、不以此為病耳。

兄の文章が高遠絶異であることは今更言うまでもないことだが難を言えばやや饒舌に過ぎることである、しかしこの難点も作品が清新(すつきりとしていて新しい)さに裏付けられているから病弊とは言えない。と陸雲作品において特に目立つ特質として斬新性をあげて、陸雲は兄の文学を高く評価する。

これらは陸雲の評だが陸機文学の「新」に言及したものは他にもある。

雲亦善屬文。清新不及機、而口辨持論過之。

(陸機陸雲別傳 文選卷三十八李注所引)
とその人物別伝の中でも清新を挙げ、

自連珠以下、擬者間出。(略)唯士衡運思、理新文敏、而裁章置句、廣於舊篇。(文心雕龍 雜文)

『文心雕龍』も揚雄の「連珠」を擬作した中で陸機の「演連珠」のみがその論理の新しさにおいて他の作品より優れていると評価している。

陸機文学の新奇・新綺・清新性を評価し、文学に「新奇」が必要であることを主張した陸雲の文学論を釜谷武志氏は、「陳腐な表現、使い古された言い回しではなく、新奇さの裏打ちがあつてこそ、始めてすぐれた文学たり得るのだ。(略)陸雲にとって新奇という概念は、文学におけるひとつの要諦なのである。」

〔陸雲「兄への書簡」その文学論的考察〕中国文学報第二十八冊)と指摘している。そしてこの主張は六朝において陸雲より以前に見ることができない。

では陸雲の文学論において「新」は何ゆえに主張されいかなる背景を持つのか。それは、異彩を放つ陸機の存在ゆえに着目主張され、陸機の従来の文学には見られぬ、より美麗な修辞文学を背景に主張されたのである。その陸機の文学のどこに新奇性があつたのか。高橋和巳氏は「陸機の伝記とその文学」(中国文学報第十一第十二冊)の中で陸機の特質を次のように言う。巨視的発想法について、

同時代の詩人、張協や左思が、その敏感な感性を自然の推移にそいで、細密描写へと向いつつあつたとき、陸機は逆に、ほとんど観念的に、巨大な對比の相対自然を把えようとしていた。秋のおとずれを、左思が、「柔條は旦夕に勁く 緑葉は日夜に黄ばむ」(雜詩)と表現し、張協が、「蜻蛉は階下に吟じ 飛蛾は明燭を拂う」(雜詩十首の二)と細かく観察しようと努力しているとき、陸機は「時逝きて柔風戢まり 歳暮れて商叅飛ぶ 曾雲に温液なく 嚴霜に凝威あり」(園葵) あるいはまた、「夏條は鮮やけき藻を焦がし 寒水は衝きあぐる波を結らす」(從軍行)と、より総括的な視点から、往々にして季節の対比自体をも視野におさめて、そのうえで、観念的に奇異な、また斬新な表現を探究していた。

賦および句について、

明の徐師曾の『文體明辯』が司馬相如の諸賦において、すでに「俳語」が顯著であることを指摘しつつ、俳語がその全篇をおおうに至った代表的な作品として、陸機の「文の賦」を「俳賦」の項の冒頭におくのは正しい。賦は陸

機にいたって、たしかに形式的には新生面を開いた。しかも(略)その対句構成は旧來のかたちをはなはだしく変容せしめている。たとえば先に引用した「豪士の賦」の序文につきのような対句があらわれる。「落葉は微風を俟つて以て隕つ。而れども風の力は蓋し寡し。孟嘗は雍門に遭いて而して泣く。而れども琴の感は以て未なり。」文体構成上からみると、かかる自然と人事の対比による対句は、詩賦表現史上ほとんど前人未踏のものである。

比喩について、通俗化を恐れず説明すれば、普通、比興という場合は、「葉が黄ばむ、そのように人の命も衰える。」という型に単純化できる。一センチンス内部の比喩であることをこえて、葉が黄ばむという部分が拡大されあるいは独立するとき、それは「興」といわれる。ところが陸機のこの賦は、そのつぎに、「人の命の衰えるように、また花は散る」という逆転した比喩が継続する。声律上のことだけでなく、内容的にも波のうねりのような起伏があり、感興の飛沈に富む理由は一にかかってこの独特な発想法にある。

高橋和巳氏は、陸機が発想・対句・比興・典故・押韻という美文学上の修辭主義に新しい獨創性を展開したことを指摘する。

『詩品』は、陸機を「陸機は太康の英たり」(『序』)と、西晋における第一等の人として挙げ、沈約は、潘岳とともに名を連ねてこの二人が飛び抜けていると言ひ(『降りて元康に及び、潘、陸特に秀づ』)『宋書』謝靈運傳論、下つて明の胡應麟は「士衡諸子は六代の初めなり」(『詩藪』)陸機が六朝文学の初まりであるとさえ言う。陸機に代表される斬新で獨創性のある文学が、後のいわゆる六朝文学を決定付けたと言ふわけである。では、陸機の文学のどこに新しさがあるのか。

先に挙げた兄陸機への手紙の中で、詩文の修辭潤色に自信の持てない陸雲が兄の加筆によつて自作に新奇性がうまれるのを期待した事実があつたが、今ここに陸機と陸雲の實際の詩を読み比べることによつて、陸機の詩の特質とはどんなものなのか見てみよう。『文選』には二人の同題の詩「為顧彦先贈婦」が収められている。妻から夫に応返する詩の代作である。

陸機

東南有思婦	東南に思婦有り
長歎充幽闈	長歎 幽闈に充てり
借問歎何為	借問す歎ずるは何の為ぞ
佳人眇天末	佳人 天末に眇かなり
遊官久不歸	遊官して久しく歸らず
山川脩且闊	山川脩くして且つ闊かなり
形影參商乖	形影は參商のごと乖 <small>そぐ</small> き
音息曠不達	音息も曠しく達せず
離合非有常	離合は常有るに非ず
譬彼弦與括	彼の弦と括とに譬えられる
願保金石軀	願はくは金石の軀を保ち
慰妾長飢渴	妾が長飢渴を慰めんことを

陸雲

悠悠君行邁	悠悠として君は行き邁く
榮榮妾獨止	榮榮として妾は獨り止まる
山河安可踰	山河安くんぞ踰ゆ可けん
永路隔萬里	永路 萬里を隔てり
京室多妖冶	京室には妖冶多く
粲粲都人子	粲粲たる都人子あらん
雅步摺纖腰	雅やかに纖 <small>ほ</small> き腰を摺 <small>ひ</small> き
巧笑發皓齒	巧みに笑いて皓き齒を發 <small>は</small> かん
佳麗良可美	佳麗 良に美す可し
衰賤焉足紀	衰賤 焉くんぞ紀すに足らん
遠蒙眷顧言	遠かに眷顧の言を蒙るも
銜恩非望始	恩を銜 <small>か</small> むこと始めより望みしに非ず

(卷二十五)

(卷二十四)

両詩の冒頭四句は共に遠く離れた夫との距離的な隔たりを述べるが、この冒頭四句については後ほど触れるとして、詩の中心である遠く離れ長くあわない夫への思いを述べる時、陸雲は

京室には妖冶多く

粲粲たる都人子あらん
 雅やかに歩みて織き腰を摺き
 巧みに笑いて皓き齒を發かん
 とうたう。都に居るであろう若くて美しくセンスのいい、しかも艶ましい織腰・皓齒の女性への嫉妬を主題にし、

佳麗 良に美す可し

衰賤 焉くんぞ紀すに足らん

田舎に居る衰えた容色の吾身と引き比べてのやるせない恨みごとを述べている。その表現する言葉は「妖冶」といい「都人子」といい、又上品に、歩く細い腰の美人、ニッコリと笑いかける白い歯の美人というように、まことに内容は具体的であり即物的で物そのものをそのまま表現している。対して陸機のそれは、「遊官して久しく歸らず 山川脩くして且つ闊かなり」と冒頭四句と同じ内容の距離的な隔たりを再び言う繁多に過ぎるくらいが陸雲の「然れども猶ほ皆微や多からんと欲す」（與兄平原書）の指摘の通り確かに見られるが、それはともかくとして、続く四句は決定的に陸雲とは違っている。

形影は參商のごと乖き

音息も曠しく達せず

離合は常有るに非ず

彼の弦と括とに譬えらる

ここには具体的な事は何ひとつ述べられていない。「形」と「影」はともに必ずくつづいているもの、「參」と「商」はともに星の名、本来仲の良いものが互いに離れ住み、仲の良さを通じ合えないという故事をふまえている。「音息」は消息、便りのこと、便りさえ長らく途絶えて届かない。人の世に必ずある「離合」は、丁度「弦」と「括」のようなもの、弓を射れば、弓の弦と矢の括とは一度は接してもまたはるか遠く飛び去ってしまう、そのようにあなたとは遠く離れているというわけである。こうした比喻はまことに巧みで効果的であると言えよう。距離的な隔たりによる心情を「悲しい」とか「寂しい」とか具体的に述べるよりも、はるかに「やりきれないばかりの辛さ」が伝わって来る。離別の境遇と心情を直截的に描写することなく、頭の中で総合的に発酵するのを待った上で、精製されて出てきたものを連ねていつているかのようなのである。陸機は自らが著わした「文賦」で「精八極に驚せ、心萬仞に遊ぶ。其の致るや、情瞳矐として彌鮮やかに、物昭晰にして互に進む」と、創作上の精神集中の重要性を論じている。精神を八極

の彼方に馳せ、心を萬仞の世界に遊ばせた上、そこから出て来たものをエキスのように取り出せば、表現の効果は益々鮮やかに明晰になると言うのである。陸機は純粹詩といえるものを目指しているわけだが、ここにはそうした陸機の創作上の作業のあとが伺える。更にもっと二人の資質の違いが現われるのは、詩の冒頭である。陸雲が、

悠悠として君は行き邁く

瑩瑩として妾は獨り止まる

山河安くんぞ踰ゆべけん

永路 萬里を隔てり

悠々（はるかに）として君は行き邁き、瑩瑩（寂しく）として妾は独り止まる。

山河・永路は私とあなたを遠く隔ててしまっている、と夫と別れた距離的な隔たりを、具体的にそして平面的に敷き述べるのに対して、陸機は、

東南に思婦有り

長歎 幽闇に充てり

借問す歎ずるは何の為ぞ

佳人 天末に眇かなり

と展開する。東南に思婦有りの「思婦」とは後述するように新しい表現である。「幽闇」は奥深い私の部屋、「天末」とは天の果て。陸機の冒頭は単に距離の隔たりを平面的に言うのではなく「東南に思婦有り」とうたい出し、あなたは「天末に眇かなり」とうたうように、展開する背景がはるかに巨大であり構想が鳥瞰的であると言える。これは陸機の詩や文章の大きな特徴で、これまでには見られなかった発想である。このことは高橋和巳氏も「贈尚書郎顧彦先」詩をもとに指摘している。更には、

借問す歎ずるは何の為ぞ

佳人 天末に眇かなり

私の深い歎きはなぜ？。遠く離れて長い間あえない夫への思いを「なぜ？」と投げかけることによりこの詩に一本びんと張った緊張と展開への興味を魅きつける効果をうんでいる。この詩を読む方としては以下に続く詩の展開に思わず魅きつけられてしまうというわけである。いふなれば冒頭の四句において詩は高潮に達しているのである。

もう一つ言及しておかねばならないのは、中国文学において重要な修辭法のひとつである典故の使用の仕方についてである。その冒頭において、陸雲が「悠悠」

「管管」「行邁」の用語の典故に『詩経』の「悠悠として南に行く」（小雅黍苗）「獨り行きて管管たり」（唐風杖杜）「行き邁くこと靡靡たり」（王風黍離）を引くのに対して、陸機は近い過去である建安の世に粲然と輝く文学を華ひらかせた曹植の詩から、用語と表現方法を取り入れている。つまり、曹植の「上に愁思の婦あり、悲歎して余哀あり」（七哀詩）をもとに「思婦」なる表現を用い、さらには、「東南に思婦有り」とうたい出す語形のしくみを曹植の「雜詩」「西北に織婦有り」からとっている。曹植は『詩品』で「平原兄弟は鬱として文棟たり」「昔、曹劉は殆ど文章の聖」（序）「骨気は奇高、詞彩は華茂なり。粲として今古に溢れ、卓爾として不群なり」（曹植評）と、最高の賛辞でもって激賞される詩人である。陸雲のように『詩経』を引くのではそのもたらす効果の新鮮みにはいうまでもなく大きな差異が生じる。

以上から見るに、陸機は「文賦」でみずから言うごとく詩作の上では「古今を須臾に觀、四海を一瞬に撫し、然る後義を選び部を按じ、辭を考え班に就く」べき点をそのまま実践しており、その作品が弟陸雲の目には斬新な目新しさをもつたものと映ったわけである。だから陸雲は兄への手紙の中でこうも言う、「益ます古ならず皆新綺なり。此れを用て已に自ら洋洋たるのみ」兄の作品には「新綺」性があるという点だけで水を満々とたたえたように立派なのであると言うのである。

潘岳

「陸機は太康の英たり、安仁・景陽は輔たり」（詩品 序）という西晋太康年間、建安に次ぐ文学の黄金時代であった。『詩品』は代表的詩人に「三張・二陸・兩潘・一左」を挙げ、太康を建安の風流を受け継いだ「文章の中興」期であると言う。その潘岳・陸機で代表される西晋文学とは、

降及元康、潘陸特秀。（略）纏眉星稠、繁文綺合。（宋書 謝靈運傳論）
 晋世群才、稍入輕綺。張・潘・左・陸・比肩詩衢。采縟於正始、力柔於建安。
 （文心雕龍 明詩）

魏の華やかさを瞻望しつつ、魏よりも縟麗な采飾を施す修辭主義が最大の特質であった。そして西晋の双璧潘岳も「新」の評価を得る。

及潘岳繼作、實鍾其美。（略）能義直而文婉、體舊而趣新。金鹿・澤蘭、莫之或繼也。
 （文心雕龍 哀弔）
 潘岳構意、專師孝山、巧於序悲、易入新切。（御覽五九六作新麗）
 （同 誅碑）

人の死を悼む哀傷の文学を得意とする潘岳の「金鹿哀辭」「為任子成妻作孤女澤蘭哀辭」は古い様式ながら趣きは新しく、『文選』収録八篇の誄のうち四篇を占める潘岳の誄は、悲哀の叙述に巧みで新切・新麗な趣きがあると劉勰は言う。
 試みにわが幼子金鹿の死を傷む「金鹿哀辭」を見てみよう。

嗟我金鹿	嗟我が金鹿
天資特挺	天資特に挺んで
鬢髮凝膚	鬢かなる髪と凝かなる膚をもち
蛾眉凝領	蛾眉にして凝領なりき
柔情和泰	柔しき情は和かにして泰らか
朗心聰警	朗るき心は聰く警やかにし
嗚呼上天	嗚呼上天よ
胡忍我門	胡ぞ我が門に忍きや
良嬪短世	良き嬪は短世し
令子天昏	令き子は天昏す
既披我幹	既に我が幹を披き
又剪我根	又我が根を剪る
槐如塊木	槐は塊みし木の如く
枯菱獨存	枯れし菱獨り存す
捐子中野	子を中野に捐て
遵我歸路	我を歸路に遵わしむ
將反如疑	將に反らんとして疑う如く
迴首長顧	首を廻らして長顧す

この哀辭を『文心雕龍』は「體舊而趣新」と言う。「體舊」の體を全体の形式と構造とするならなるほど「金鹿」「澤蘭」はともに古い四言形式をとっている。體舊はともかく「趣新」の点でまず意に留まるのは、ありし日の幼子の容姿と資質を

表現する用語の新しきである。「天資特挺」といい「朗心聰警」という表現は人物を評する評語としては、潘岳より三年前に亡くなった陳寿の『三國志』に

盧清・警明理、百鍊不消。 (崔琰傳)

など散見できるが、後世においてこそ頻出する評語である。例えば、

桓宣武表云、謝尚神懷挺率、少致民譽。(平洛表 世說賞譽及注所引)

尚率易挺達、昭悟令上地。 (晋陽秋 世說賞譽注所引)

鍾毓為黃門郎、有機警。 (世說 排調)

顧榮少朗俊機警、風穎標徹。 (文士傳 世說德行注所引)

蒯幼聰警、讀書過目便能諷誦。 (梁書 江蒯傳)

南康簡王績、便即時首報、衆咸歎其聰警。 (梁書 高祖三王傳)

傅綽聰警特達、竝一代之英靈矣。 (陳書 傅綽傳贊)

のごとく枚挙にいとまがない。こうした言辭の新しきに加えて潘岳は鋭く光る修辭の妙とその流れるリズムを特質とする。『文心雕龍』は次のように言う、「安仁は輕敏、故に鋒發（あき）わかれて韻流れ、士衡は矜重、故に情繁（あや）くして辭隱る。」(體性) 確かに「金鹿哀辭」は四言の短く簡潔なリズムが、却って哀傷の真情を莊嚴に響かせる効果を生んでいる。更には金鹿生前の姿をのべ、わが妻の上に幼子までも取られた己が心の胸裂く悲しみを表現する言辭、

既に我が幹を披（ひ）き

又我が根を剪る

槐は癭（うぶ）みし木の如く

枯れし亥（う）獨り存す

はまさしく一篇の警策となつて読む者に深い悲しみを体感せしめる。^③

こうした潘岳・陸機の瞠目すべき文学の斬新性によってこそ『詩品』は西晋太康文学を建安に次ぐ「文章之中興也」と高く評価したのである。

夏侯湛 張翰

この西晋太康期に「新」をもって評された文人に夏侯湛・張翰がいる。

夏侯湛幼有盛才、文章宏富、善構新詞、而美容觀、與潘岳友善。^④

張翰有清才美望、博學善屬文、造次立成、辭義清新。 (晋書 夏侯湛傳)

張翰字季鷹、吳郡人也。文藻新麗。(今書七志 文選卷二十九注所引)

「新詞」「清新」「新麗」の評語で評される夏侯湛・張翰は、奇しくもともに西晋・新文学の雄、陸機・潘岳と深いつながりがあった。

夏侯湛はその美貌ゆえに潘岳とともに「連璧」ともてはやされた美男子である。

『詩品』は、「孝冲(夏侯湛)は後進と曰うと雖も、安仁に重んぜらる」(下品)

とその詩作活動を評し、『文心雕龍』は、「夏侯孝若は體を具うれども皆微なり」

(才略)とやや才能に難あるを言うが、「岳湛は聯璧の華を曜（あ）かす」(時序) 文学

は潘岳と連璧の光彩を放っていると批評する。『世說新語』には、夏侯湛がで

き上ったばかりの詩を潘岳に見せると、岳はこの詩はただ温雅であるだけではな

くその上に孝悌の性をも表わしているとえらく感嘆し、感じる余り自分も「家風

詩」を作ったという話がある(文学)。潘岳は親友湛の死に接して「夏侯常侍誄

を残している。『文選』は湛の「東方朔畫贊」を収めている。

張翰は陸機と同じく吳郡の出身である。吳滅亡後、西晋に仕えた張翰は同郡出身の顧榮にその複雑な心境を述べ、又その顧榮が死んだ時弔問に向いて、生前共に楽しんだ琴を撫して激しく慟哭したということが『世說』に見えるが、その顧榮のために妻に贈る詩(前出)を代作したのが陸機であった。張翰が有名なのは折角西晋朝に仕えながら秋風の立つのを見て、故郷吳の鱸魚の膾が恋しく、この人生、地位のためにあの美味を捨てられようかと職を投げ打って呉に馬を走らせた曠達ぶりによってであるが、なるほど「江東の歩兵(阮籍)」と時人の評目を得るだけの常識破りな人物であった。その張翰の文学を『文心雕龍』は、「季鷹は短韻に辨切なり」(才略)短篇に鋭いものを見せると言い、『詩品』は、「季鷹の黄華の唱は美を具へずと雖も、文彩は高麗なり」(中品)と評す。『詩品』に言う「黄華之唱」とは『文選』巻二十九にある「雜詩」を指し、『文心雕龍』も張翰の「雜詩」を次のように評している。「山川を圖狀し、雲物を影写するに、比義を織綻して、以て其の華を敷かざるは莫く、聽を驚かせ視を回らすは、此に資りて績を効す。又た安仁の螢賦に流金の沙に在りと云い、季鷹の雜詩に青條は翠を總むるが若しと云うは、皆其の義なる者なり。」(比興) 比喻を織りなして言辭の華を敷き、人の耳目を驚かせる効果をあげた例に、潘岳の「螢火賦」とともに張翰の「雜詩」「青條若擲翠」の句を挙げるのである。『文選』に載る「雜詩」は全十四句。その冒頭は、

暮春和氣應 暮春和氣應じ

白日照園林 白日園林を照らす

青條若摠翠 青條は翠を摠むるが若く

黃華如散金 黃華は金を散らすが如し

暮春の和氣と白日の照射のもと、色濃い青條の緑と黄色い花の黄金の如き煌めきを描写する。任率曠達の人物とは思えぬ繊細な感覚であり、でき映えは緻密で美しい。又対句としての「青條若摠翠 黃華如散金」は二句が相乗して暮春の生き生きとした色濃い草木を映しており、まさしく『詩品』の評「文彩高麗」にかなしい、『文心雕龍』の評「辨切」「敷其華」「驚聽回視」にあたいする。

『文士傳』が「辭義清新」といい『今書七志』が「文藻新麗」と張翰を評したのは以上のような緻密な美しさを言うのである。又夏侯湛が「善構新詞」と評される「新詞」とは、比喻を織りなして言辭の華を敷きつめ、対句を金沙の如くちりばめて人の耳目を驚かせる効果をもった、修辭主義の文学を言うのであると言えよう。

劉勰が、作家の才能を評論する才略篇で、西晋の文人として列挙した十五名のうち、「新」なる評語にかかわる文人は、三分の一の五名にのぼる。潘岳、陸機、陸雲、夏侯湛、張翰であり、他は張華、孫楚、摯虞、傅玄、傅咸、成公綏、曹摯、張載、張協、劉琨である。劉勰の意識の下には、どうやら、西晋文字の「新」を意識する動きがあったようである。このことからしても、右に述べてきた西晋文学の特質としての「新」は、劉勰の考えと、その一端は符合していると言えよう。又、建安文学の文人たちに「新」の評語が見られず、西晋になってそれが見られるようになったということは、西晋文学の特質である比喻、対句、典故、押韻を駆使する修辭主義の文学が、それ以前に見られぬ斬新性を輝かせていたということであり、また、建安以降における西晋文学の文学史上における画期的な一時代をも物語るものである。

こうした西晋文学の特質を、明、胡應麟は、その著『詩藪』で、「士衡・安仁は一変して、俳偶開く」(外篇) 潘岳、陸機は漢魏の詩風を一変して、対句表現の華を開かせたと指摘し、「文賦に云う、詩は情に縁りて綺靡なりと。六朝の詩の自つて出ずる所なり、漢以前には有る無し。」(外篇)と、漢以前には存在しなかった修辭主義が、陸機の『文賦』の綺靡を主張するのを出発点として、以降の文学に影響を与えたことを言うのは正しい。まさしく、西晋文学の「新」は、未だ嘗て

存在せぬものであった。

三、六朝文学の追「新」傾向

東晋

『詩藪』に、「士衡諸子は六代の初めなり」(外篇)「潘陸は六朝の主なり」(同) と言うのは、けだし卓見と言える。陸機、潘岳の修辭主義による斬新な「新」文学が、六朝の美文学を方向付けたのである。「新」なる評語を通して、以降の六朝文学を総覧すれば、

謝鎮西(謝尚)道敬仁(王脩)、文學鏃鏃、無能不新。(世説 賞誉)

江左風味、盛道家之言、郭璞舉其靈變、許詢極其名理、(殷)仲文玄氣、猶不盡除、謝混情新、得名未盛。(南齋書 文学傳論)

『世説』が伝える王脩の文学が「新」であるという謝尚の言葉、『南齋書』に見える謝混の文学がそれまでの詩風を刷新する新しいものであったと評する、その王脩、謝混は東晋の人である。東晋は、文学史上、

江左風味、盛道家之言。(南齋書 文学傳論)

有晉中興、玄風獨振。(宋書 謝靈運傳論)

江左篇製、溺乎玄風。(文心雕龍 明詩)

自中朝貴玄、江左稱盛、因談餘氣、流成文體。(同 時序)

永嘉時、貴黃老、稍尚虛談、于時篇什、理過其辭、淡乎寡味。爰及江表、微波尚傳。(詩品 序)

清談の隆盛によって、文学に老荘の風味をたっぷり含んだ時代であった。王脩の文藻・学論は先端をいき、「能く新ならざるは無し」の「新」とは、彼が仏教に親しみ、『易』をもとにした「賢人論」を著わし、『世説』文学盛んに清談を行って、「超悟の人」と目された(同 賞誉 品藻)ことからすれば、まさしく時代の先端を行く玄風の斬新性を、その詩文、学論に現わしていたということである。謝混の「情は新なるも名を得ること未だ盛んならず」の「新」は、王脩のいいとは意味が異なる。サロンの清談の雄、謝安の孫である謝混は、時の名士たちと同

じく頻りに談論を行っているが、『世説』言語 雅量、その文学において得た評価は、同じ東晋の孫綽や許詢のような「詩は皆平典にして、道徳論に似たり」(『詩品』序)というものではなかった。『詩品』は、謝混の「離宴詩」を、五言の警策であると評価し(序)、その詩風を、

殊に風流媚趣を得たり

益壽(謝混)は輕華なり

謝益壽、殷仲文を以て華綺の冠と為すも、殷は競わず。

と評す。玄風が独り振った東晋の世において、謝混は玄風に溺れることなく、「媚趣」の風をその文学に持っていたのである。それがゆえに、

建武(東晋初 元帝)自り義熙(東晋末 安帝)に暨ぶまで、歴載將に百ならんとす。比響・聯辭、波のごとく屬なり雲のごとく委ると雖も、言を上徳に寄せ、意を玄珠に託さざるは莫し。瀟瀟の辭、聞く無きのみ。

仲文(殷仲文)始めて、孫(綽)、許(詢)の風を革め、叔源(謝混)

は大いに太元(東晋 孝武帝)の氣を變ず。(宋書 謝靈運傳論)

義熙中に逮びて、謝益壽(混)、斐然として繼ぎ作る。(詩品 序)

義熙中に至りて、謝混始めて改む。(續晋陽秋 世説文学注所引)

と、文学史上の東晋期の動きを史書に伝えているがごとく、謝混は百年に及ぶ玄言詩の風を、初めて変革する功績をうち建てたという評価を得る。謝混の「情新」とは、玄風盛んな中でそれに溺れることなくきらりと異彩を放つものがあつたことを言う。梁 蕭子頤が謝混に与えた「情新」の評語は、このような意味を持っているのである。しかもその功績は、興善宏氏が推論することく、抽象的な哲学理論のみの東晋の詩を、自然の美を文字によって形象する劉宋詩の開拓者として、山水詩の方へ導こうとしたであろう功績であつた。このように、東晋において「新」なる評語は、王脩の文学が「新」であると評するがごとく玄風というその時代の流行の先鋭をとらえ、又その玄風に抵抗して次代の新しい文学を生み出そうとする謝混のような「新」波動を敏感にとらえるという時流の脈打ちをそのまま伝える評語なのである。

齊・梁

六朝文学は、永明體 宮體詩に象徴されるがごとく、靡麗な修辭のみに走ることで極まりを見せるが、そうした齊・梁文学における「新」とはどういうものなのだろうか。

陸厥少有風槩、好屬文、五言詩體甚新變。(南齊書 陸厥傳)

徐擒屬文好為新變、不拘舊體。(梁書 徐擒傳)

齋永明中、文士王融謝眺沈約、文章始用四聲、以為新變。至是轉拘聲韻、彌尚靡麗、復踰於往時。(同 庾肩吾傳)

陸厥・徐擒の詩そして王融・謝眺・沈約が声韻上の約束として四声を主張したことを「新變」と評す。沈約等の四声説が従来の文学を新変させたことが、結果として後に益々靡麗の風を生むことになるという功罪は別として、これらの「新變」の評は肯定的評価を得た評語であることはまちがいない。なぜなら文学に新しさが必要なことは、前述のごとく、西晋陸雲が「興兄平原書」で、「新奇無くして、體力は甚だ困瘁するのみ」と説いており、『文心雕龍』も、「新意」と「新奇」な要素が、文学には必要であると次のように説いていることからそれは言えよう。

洞曉情變、曲昭文體。然後能字申新意、雕畫奇辭。昭體故意新而不亂、曉變故辭奇而不贅。(風骨)

加えて、齊梁の人蕭頤子頤も「新變」なることばを用いて、

習玩為理、事久則瀆。在乎文章、彌患凡舊。若無新變、不能代雄。(南齊書 文学傳論)

「若し新變無ければ、代りて雄たる能はず」と、新變すべき文学の必要性を説いている。「新變」なる評語はこのように文学に必要な要素として主張される文学論を背景にしているのである。陸厥の五言詩が新變したものであること、及び、徐擒の文が新變をなすものであつたことの考察は後に述べるとして、「庾肩吾傳」に見える「文章に始めて四聲を用いて、以て新變と為す」ということからすれば、

齊梁における文学上の新しい傾向を表わす「新」の意味内容には、一つには、韻を制定して音律上の効果をねらうという音韻上の要素があったと言える。

また「新」の持つもう一つの要素として、『詩品』に、

近任昉・王元長（融）等、詞不貴奇、競須新事。爾來作者、浸以成俗。

（序）

といい、『梁書』に、

王僧儒、好墳籍、聚書至萬餘卷、率多異本、與沈約任昉家書相埒。少

篤志精力、於書無所不覩。其文麗逸、多用新事、人所未見者、世重其富。

（王僧儒傳）

と評するがごとく、人の未だ見ざる目新しい典故（新事）を自在にあやつることによって自分の作品に工夫を加えるという典故上の要素があった。典故の目新しさを競ったという任昉は、『詩品』に、「昉は既に博物にして、動もすれば輒ち事を用う。所以に詩は奇なるを得ず」（中品）博識なるがゆえに何かといえは典故を用いる病弊がある、『南史』本伝に、「晩節轉た好んで詩を著わし、以て、沈（約）を傾けんと欲す。事を用いること、多に過ぎ、屬辭流便なるを得ず。典故が多すぎて、詩になめらかさが無いと、その典故の多用ぶりを評されている。典故を用いるには沢山の資料と、博い学識がなければならないが、任昉は、「書に於いて見ざる所無く、家は貧と雖も、書を聚めて萬餘卷に至る。率異本多し。」（『南史』本傳）というほどの蔵書を有して、博い知識を養っていたようである。一方、王僧儒の方も、任昉の蔵書及び沈約の家書に匹敵する、万余卷の書を聚めて精力的に目を通し、人の知らない目新しい典故を用いて、世間の評判を得ており、齊永明期には、竟陵王蕭子良の建康郊外の西邸で、文学を以て友会するサロンに参集していたメンバーの一人であった。サロンを形成する任昉、王融、沈約、謝朓、范雲、陸倕、蕭琛、蕭衍（梁武帝）を、「竟陵の八友」と呼ぶが、王僧儒もその中で、「士友の為に推重される」こと甚だしいものがあつたという。そのサロンに参集していた梁武帝は、文士たちを集めては、そのたびごとに、経書、史書中の事例から策問し、帝を感心させる博識を見せた者には、賞品をとらせるとい遊びをしてきた。沈約や范雲は、僅かの事例をとらえて広汎に及ぶ見識を披瀝してほうびを得る常連であつたらしい。題として、「錦の被」の事について策問した時は、

全員答え終えた後、帝が試みに劉孝標を呼んで同じことを問うてみると、劉孝標は紙と筆を所望するや、たちまちのうちに十余りの事例を列挙して、満坐の文士たちを驚嘆させ、帝も思わず顔色を失くしたという。〔『南史』劉峻伝。劉孝標は若い頃、自ら書を読むことを課し、終夜眠らず、居眠りして髪がジリジリと焼けて目が覚めると、復び読む、というほどであつたが、それでもなお、讀書不足であると痛感し、都に異書あると聞けば必ず出かけて拝覧を申し出、人から「書淫」と評判されたという（『梁書』本傳）。王僧儒や任昉、劉孝標のような人物が存在し、又、梁武帝が文士の集会でクイズあそびのごとき遊戯をしていたということが、当時の文学の新しい傾向に、韻律に加えて目新しい典故を使用することがあつたことを物語るものである。

さて、先程「新變」の例として引用した『南齊書』陸厥傳、『梁書』徐擒傳、庾肩吾傳のうち、五言詩が「新變」のものであつたという陸厥の伝を今少し詳しく引用すると、

陸厥、少有風采、好屬文、五言詩體甚新變。（略）永明末、盛為文章。具

興沈約、陳郡謝朓、琅邪王融、以氣類相推轂。汝南周顒、善識聲韻。約等文、皆用宮商、以平上去入為四聲、以比制韻、不可增減、世呼為永明體。

（南齊書 陸厥傳）

と『南齊書』は記す。陸厥の五言詩は全体の趣きが甚だ「新變」であつたとは、沈約、謝朓、王融等の四声による音韻の法則を制定して音律上の効果をねらつた、世にいう「永明體」の特質を持ったものということになる。こうした音律上の表現効果をねらつた試みがいかに「新」しいものとして世にもてはやされていたかということは次の例によつても明らかとなる。

王筠、又嘗為詩呈約。（約）即報書云、覽所示詩、實為麗則、聲和被紙、光影盈字。（略）古情拙目、每佇新奇。爛然總至、權輿已盡。

（梁書 王筠傳）

当世の「辭宗」と目されていた沈約が、王筠の文を見るごとに、感に堪えず吟誦して、とてもこの男にはかなわないと思つた、と伝えられている王筠である。沈

約は彼の詩を、声韻全紙を覆い、光彩字間に満ち、古きは少しもなく、「新奇」に輝いていると絶賛しているのである。この「新奇」とは何を意味するのか。それは王筠と沈約にまつわる次の逸話が参考になろう。沈約が「郊居賦」を作った草稿の段階で王筠に見せたとき、王筠は「雌霓連陸」の下りまで読み進んで、なんなく「霓」という字を「ゲキ」と読んで沈約に手をたたいて喜ばせたという。沈約は、韻の効果として「ゲキ」と読ませる意図を持ってこの字を用いていたのだが、おそらく人は皆そうは読んでくれずに「ゲイ」と読むだろうと思っていたのである。沈約は王筠のその「知音」の深さに感嘆したという。(『梁書』本傳)

以上に見てきた「新」評は、いわゆる「永明體」と呼ばれる齊朝文学の高潮時にかかわるものであるが、次の梁朝において、「宮體」又は「徐庾體」とよばれる、靡麗なまでの文学においても、「新」なる評を見ることが出来る。

王(梁 簡文帝蕭綱) 入為皇太子、(擢) 轉家令、兼掌管記、尋帶領直。擢、属文好為新變、不拘舊體。(略) 擢、文體既別、春坊盡學之。宮體之號、自斯而起。(梁書 徐擒傳)

梁、簡文帝の晋安王及び皇太子時代から、王の左右に仕えた徐擒の文学は、その伝統的な旧体に縛られない「新變」した文体が既に他と異なっており、皇太子舎に仕える人々はことごとくその徐擒の文体を学んだという。「宮體」の號はこうして徐擒の文体から発生したというのである。その徐擒の息子である徐陵について「陳書」は次のように伝える。

世祖(陳 文帝) 高祖(陳 宣帝) 之世、國家有大手筆、皆(徐) 陵草之。其文頗變舊體、銜裁巧密、多有新意。每一文出手、好事者已傳写成誦。(陳書 徐陵傳)

陳の世祖、高祖の世、國家に大がかりで正式な文章を書かねばならない時は、帝は必ず徐陵に書かせ、しかもその文は巧密にして「新意」があり、墨の乾かぬうちから好事家たちが伝写、暗誦したと伝える。徐陵も父と同じく、梁簡文帝の晋安王時代からその左右に仕え、王が皇太子となって東宮に移るや学士に選ばれているのである。時あたかも、簡文帝の東宮御所では、「文学の士を引納し、賞接して倦むこと無く、恒に篇籍を討論し、繼ぐに文章を以てす」る集まりがあった

(『梁書』簡文帝紀)。そしてここで流行していたのが、

然傷於輕豔、當時號曰宮體。(梁書 簡文帝紀)

輕艶なる「宮體」と呼ばれた詩風であった。このことからすれば、徐擒・徐陵父子の「新變」「新意」とは、輕體にして巧密、綺靡な「宮體」とよばれる詩風を意味する。

また、同じく梁・簡文帝の東宮御所時代、十三にしてそこの論難の聴講を許されたという姚察は、

察、終日恬靜、唯以書記為業、於墳籍無所不視。每有製述、多用新奇。人所未見、咸重富博。(陳書 姚察傳)

文を作るたびに「新奇」な表現を用い、人はその表現が目にしたこともないものであったがゆえに、その博識ぶりを重んじたという。姚察は、梁・陳兩朝史の編纂を手がけているが、目を通さない古典はなかったというから、前出の『世說新語』に注をつけた劉孝標に似て、頗る博學であった。ここに言う姚察の「新奇」とは先に述べた典故の部類に属する評である。

ここに、西晋以降、南北朝期における「新」文学への傾向とその実態を述べてきたが、この期において、現実の事象として、新奇な表現をねらい、人の思いもよらぬ目新しい典故を用い、音律の妙を工夫して、従来の文学を新變することに腐心したのは文学史上の事実であり、又、実際に人々がそれをもてはやしたのも事実であった。そして評語「新」は、文学に新風を吹き込もうとする動きをそのままに映し常にその時代の潮流をとらえている。しかしこうした新奇性を追い求める文学に厳しい反撥を見せる文人が居たのも、これも又、事実であった。

四、『文心雕龍』における「新」批判

『文心雕龍』は、こうした輕靡に過ぎる文学の風を憂慮し、余りの混乱を矯正するために、劉勰によって著わされたものであった。

『文心雕龍』に言う、

宗物文詠、體有因革。莊老告退、而山水方滋。儷采百字之偶、爭價一句之奇、情必極貌以寫物、辭必窮力而追新。此近世之所競也。 (明詩)

宋初以來現代に及ぶまで、百字にわたる対偶を連ね、たった一句の新奇さを争い、「辭は必ず力を窮めて新を追う」表現の新を追求して来た、そして、

推而論之、則黃唐淳而質(略)宋初訛而新。從質及訛、彌近彌澆。何則、競今疎古、風末氣衰也。 (通變)

宋初の文学は、「訛(正統なものをわざとゆがめて異なった方向にすること)にして新」ということになるが、黄唐の世より現代に近づくにつれて、文学はますます味気なくなってきたと言おう。そして、味気なくした「近代の辭人」たちの本質を厳しく分析する。

自近代辭人、率好詭巧。原其為體、訛勢所變。厭黷舊式、故穿鑿取新。察其訛意、似難而實無他術也、反正而已。故文反正為乏、辭反正為奇。效奇之法、必顛倒文句。上字而抑下、中辭而出外。回互不常、則新色耳。 (定勢)

近代の作家たちは、文飾の技巧のために、不正なまでのほじくり返しを見せて、「新」を追求する。それは、「訛」ということだが、どうするかと言えば、「正」(正)の字を、裏返しにすれば、「乏」(乏)になるようなもので、正統な表現を、裏返しにして、新奇性を出すにすぎない。文句を顛倒させ、上字を下に置き、句の中にあるべき語を、句の中から外に出すというように、常規を逸してさえいれば、それは「新色」な文学なのである、

夫吃文為患、生於好詭。逐新趣異、故喉唇糾紛。 (聲律)

文の韻律においても、詭巧を好むあまり吃音のごとき症状を呈している。つまりは、「新」と奇異をのみ追求して、結果は喉はひきつけ唇はまわらなくなるということになる、と厳しく批判する。

清、孫德謙は、その著『六朝麗指』において、こうした「新」を追求する傾向

のあった作品の実例を挙げている。

有詭更文體者、如韋琳之有鉅表、袁陽源之有雞九錫文並勸進。是雖出於游戲、然亦力趨新奇、而不自覺其訛焉者也。 (二十九葉裏)

後梁韋琳の「鉅表」と、劉宋袁淑の「雞九錫文」と「勸進牋」の俳諧文がそれであり、また、本字を用いていないために意味が通じにくくなって、読み手に、上下に欠文があるのではないかと疑わせる例として、

有不用本字、其義難通、遂使人疑其上下有闕文者。如任彥昇為范始興作求立太宰碑表。阮略既浪、故首冒嚴科。故即固字、自假固為故、而文意甚明者、轉至不可解矣。此亦新奇之失、訛於一字者也。 (同葉)

任昉の「為范始興作求立太宰碑表」の「阮略既浪、故首冒嚴科」のくだりを挙げると、この文中、「故」はとりもなおさず「固」であるのに、「固」の代りに「故」にしており、そのためますます不可解なものになっているのであって、新奇を追う余り、一字をわざととりかえた結果である、と指摘している。まさしく、劉勰の厳しい批判を、具体的に例示してくれている。

劉勰は、こうした「新」を追い求める傾向の歴史的背景を更に理論的に分析する。

夫三皇辭質(略)漢世迄今、辭務日新、爭光鬻采、慮亦竭矣。 (養氣)

太古はことばは質素純朴であったが、漢代から現代までことばは日に日に「新」を追求して来た。「新」の追求は今に始まったことではなく既に漢代からあったのだと言っているのである。こうした傾向は自然の成りゆきだとしても、

新奇者、擯古競今、危側趣詭者也。 (體性)

作家の作風としてある、典雅、遠奥、精約、顯附、繁縟、壯麗、新奇、輕靡の風のうち、新奇な風は、古さを嫌って新しさを競うあまり、正統なものをわざとゆがめる作風となってしまうと警告し、

凡精慮造文、各競新麗。多欲練辭、莫肯研術。(總術)

せっかく精慮を傾けて文を作っても「新麗」な趣きばかりを追えば多くは語句を練ることに精力を使い果たして、文学創作の根本的な方法を研究しようとはしなくなる論なのである。ではどうすればいいのか。劉勰は、「質」を忘れてはならないことを言う。

文雖新而有質、色雖様而有本。此立賦之大體也。(詮賦)

修辭が「新」であっても、「質」(素朴で質実な内容)を裏付けとし、色彩の美しさがあっても、本来の姿を失わないことが大切であると、そのあるべき正しい方向を示す。この劉勰の示した「質」の方向とは具体的には、

推而論之、則黃唐淳而質、虞夏質而辨、商周麗而雅、楚漢侈而艷、魏晉淺而綺、宋初訛而新。從質及訛、彌近彌澹。(通變)

宋初よりも魏晉に、魏晉よりも楚漢に、楚漢よりも殷周にと、古き世の純粹、質朴な文学にかえることであり、

矯訛翻淺、還宗輕詁。斯斟酌乎質文之間、而矚括乎雅俗之際、可與言通變矣。(同)

再び經書に還ることであった。近代の作家が漢代よりも宋代の作品を模範とし、質朴と華麗、典雅と通俗という相反する文学の質のいづれかに偏してしまいう傾向にある現実を考えれば、近代作家に一番必要なのは經書であると考えたのである。

総じて劉勰は、文学論として、文学における「新」しき必要であることを評価しながらも、「新」は、奇異な目新しさに走る傾向と表裏一体のものであるがために、その結果として現出した新奇で靡麗に過ぎる文学を批判したのである。従って、「新」なる語を文学批評の評語としては、否定するもの、批判する対象のものとして用いている。

言いかえれば、史書に見られる「新」の評語は、西晋から南朝、陳までを通し

て一貫して時代の先鋭を體現した作家及び文学として肯定的に評価するものであるが、『文心雕龍』においては、西晋太康文学を代表する陸機、潘岳の、それ以前には見られない修辭主義の「新」文学をのみ評価こそすれ、東晋以降、宋、齊、梁、陳を通じて、「新」の評語は否定し批判するものとして用いているのである。まさしく史書は、六朝文風の情勢の実態を事実としてそのまま示しているのであり、『文心雕龍』は、そうした文風に憂いを抱き、混乱の矯正をはかって評論を展開したものである^⑦。

付記

本稿作成にあたり、関係資料の閲覧については本校図書館の便宜をこうむった。記して感謝の意を表したい。

注

- ① これらの評語のうち新意・新奇等は、書画の評語としても用いられ、また人物評語及び經学上の新しさを評する語として、弘新・新通・拔新・新拔・新義・新理・等がある。
- ② 「奇」字についての考察には、興善宏氏の「文心雕龍と詩品の文学觀の対立」(吉川博士退休記念中国文学論集)がある。
- ③ 高橋和巳氏は「潘岳論」(中国文学報 第七冊)の中で次のように言う。「槐如瘦木 枯菱獨存なる表現は、いささか度をすぎた感傷的言辭であるにせよ、潘岳をまつて始めてなされるべき言葉である。」
- ④ 『文士傳』は、「有盛才、文章巧思、善補雅詞、名亞潘岳。」(世説 文学注 所引)「雅詞」とする。
- ⑤ 興善宏「詩品」三九、一七八頁。朝日新聞社 中国文明選。
- ⑥ しかし『文心雕龍』においては、おおむね斬新性は反撥をもって判定される。
- ⑦ 『文心雕龍』に展開しているような、靡麗にすぎる六朝文学を批判し近代の辭人に警告を発している資料としては他に、詩品、陸厥與沈約書 裴子野雕蟲論、昭明太子文選序、答湘東王求文集及詩苑英華書、簡文帝與湘東王書、與劉孝綽書、答張纘謝示集書、元帝内典碑銘集林序、南齋書

文学傳論、梁書庾肩吾傳、周書庾信傳論、隋書經籍志、李諤上書正文
体、等があるが、本稿においては言及することができなかった。今後の
私の課題として稿を改めて発表してゆきたい。

(昭和五十七年九月十六日受理)